香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），7：49－56，2003

高等学校普通教科「家庭」に対する高校生の意識

白井由貴子，岡田みゆき，小川　育子
（教育学研究科院生*）（家庭科教育）（家庭科教育）

760－8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部

High School Students' Awareness for Home Economics Education

Yukiko Shirai, Miyuki Okada, Ikuko Ogawa

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要　旨　普通教科「家庭」を履修中の高校生を対象に，家庭科に対する好き嫌い，家庭科を学習する目的，領域別の好き嫌いや役立つと思うかどうかなどについて調査を行い，実際の学習内容や学習方法などと合わせて考察した。家庭科を好きだと感じている生徒がほとんどであるが，領域によって役立ち感や好き嫌いが異なっていた。役立ち感が高い領域ほど，好きな領域であったが，取り上げる題材や学習方法によって，これらも大きく変化することが推定された。

キーワード　高等学校，普通教科「家庭」，生徒の意識，学習方法，題材

１．はじめに

2003年度から実施されている高等学校新学習指導要領では，標準履修単位が従来の半分である２単位の「家庭基礎」が設けられるなど，普通教科「家庭」は大きな変革の時期にある[1)]。多くの高校で，「家庭基礎」が履修されつつあり，半減した授業時数の中で，いかに有効な学習を進めるかは大きな課題である。

先に，高等学校における普通教科「家庭」の現状と課題，および学習指導要領改訂に対する家庭科担当教員の意識について，香川県内の高等学校家庭科教員を対象にアンケート調査を行い，その結果を報告した[2)]。この結果，教員は，領域によって，教えやすさ・教えにくさが大きく異なっていると感じていること，配当している授業時間数も領域によって大きく異なっていること，また実験実習における問題点もいくつか明らかになった。このため，新学習指導要領の実施にあたって，「家庭基礎」の履修を想定すると，実験・実習や問題解決的学習を取り入れた授業をどう構成するかは，有効な学習のために大きな課題であることが推定された。

このような状況の中で，学習の主体である生徒には，普通教科「家庭」はどうとらえられているのであろうか。本研究では，「家庭」を履修中の生徒の家庭科に対する意識を履修内容や履修方法と合わせて把握し，生徒の立場から見た高等学校における家庭科の課題を探ることを目的とした。

2．従来の研究

高等学校普通教科「家庭」に対する高校生の意識についての研究としては，まず，男女共修となった1989年の学習指導要領の改訂の前後での変化を調べた研究があげられる。柳[3, 4]は，共修前の高校生に対する調査を行っている。中西[5, 6, 7]は，改訂の前後で調査を行い，男女共修が及ぼした高校生への影響について，家族・保育領域に対する意識を検討し，非常に大きく変化したことを指摘している。また，入江による男女共修が始まった直後の高校生の意識調査[8]では，男女で家庭科を重要だと思うかどうかや，家庭科でつけたい力などについて大きな差があることが指摘されている。さらに，荒井ら[9, 10]は，男女共学による男子高校生のジェンダー観や生活主権者意識，家庭科観を調査し，生活実践や生活主権者意識などの形成に関わる学習内容や学習方法の検討が必要だと述べている。

また，家庭科の領域ごとの高校生の意識も調べられており，食に関する佐藤らの研究[11]，保育に関する滝山の研究[12]，生活設計に関する斉藤らの研究[13, 14]，さらに，飯塚ら[15]による中学校での家庭科の履修との関連についての研究など，いくつか挙げることができる。

男女共修が定着した最近では，中屋ら[16]は「学習してよかったと思うこと」，「もっと学習したいと思うこと」についての定性的な分析を行っているが，役立ち感を実感させるような実践の充実が必要だと指摘している。また，福田[17, 18]は，家庭科の学習意義の認知及び学習態度に関する実態との関連性を高校生を対象に調査しているが，家庭科で培われた知識や技能を生活へ連関させる一貫性への認知は曖昧で，実際の学習で意欲的な行動傾向を示すのは，男子で５人に１人，女子で３人に１人であったと指摘している。

Smith ら[19]によるアメリカの高校生についての調査でも，家庭科を教科としては他教科ほど重要だとは思っていないにもかかわらず，家庭科の学習内容についてはそれぞれ重要だと思っているということから，家庭科での学習内容と実際の生活との関連づけの必要性を指摘している。教育方法については，Cosbbey ら[20]が，伝統的な方法を用いたのでは，教科内容に対するイメージは変わらないと指摘し，Klein[21]も家庭科教育での重点を skill development から human development and family resource management へ移すべきだとを提案している。

岩佐[22]は，家庭科教員と生徒への調査から，生徒は男女共修家庭科の意義を認め評価しているが，領域によって「学習してよかった」と感じるのに大きな差があることや，教師と生徒の受け取り方の違いなど，いくつか問題点があり，この解決に向けた指導方法の研究が必要だと指摘している。

これらの結果や前報[2]の教員への調査結果から，家庭科では，生徒の各領域に対する意識や実態がそれぞれ異なり，このことが科目としてのイメージや好き嫌いの感情，学習に大きな影響を及ぼしていることが示唆される。特に，家庭科の学習では，学習の主体者である高校生がどのように学習の目的や内容，方法を認識しているか，特に，役立ち感や実際の生活との関連性がどう捉えられているかが，重要な問題であると考えられる。

そこで，本研究では，普通教科「家庭」を履修中の高校生を対象に，家庭科に対する好き嫌い，家庭科の目的や内容，領域別の好き嫌いや役立ち感などについて，どう感じているかについて調査を行なった。この結果を，実際の学習内容や学習方法，および前報[2]の教員の意識調査の結果などと合わせて考察し，普通教科「家庭」の学習の課題を探ることとした。

3．方法

（1）調査方法

調査の対象は，香川県立ＴＫ高等学校の１年生および２年生である。2003年３月，自記入法により行った。有効回答数は217である。回答者の内訳は，1年生男子63名女子47名，2年生男子63名，女子44名である。

１年生も２年生も，普通教科「家庭」の「家

庭一般」を，週２時間１年間履修した。学習した領域は,「家族と家庭生活」,「家庭経済と消費」,「衣生活の設計と被服製作」,「住生活の設計と住居の管理」「ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ」の各領域である。学習方法としては,「家族と家庭生活」では，プリントを使用し教員による説明を中心とした授業,「家庭経済と消費」では携帯電話の機種選びから経済生活，消費生活，生活情報まで，意思決定場面を伴う問題解決的学習,「衣生活の設計と被服製作」は教師による衣生活の機能，衣生活材料，衣生活管理についての講義とエプロン製作実習,「住生活の設計と住居の管理」では，アパート選びなどライフステージに応じての住生活選びの意思決定場面を伴う問題解決的学習で，住生活の機能，居住性，住生活の管理までの学習を，また,「ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ」については教員が説明する授業を行った。実際の生活との関連づけを深く意識する学習を行った領域は「家庭経済と消費」であり，自分の将来の生活との関連づけを深く意識する学習は「住生活の設計と住居の管理」領域であった。「食生活の設計と調理」「乳幼児の保育と親の役割」については未習で，2003年度履修予定である。

（２）調査内容

調査内容は，普通教科「家庭」の学習に関する意識である。質問紙の領域名には，現行科目の「家庭一般」における項目,「家族と家庭生活」,「家庭経済と消費」,「食生活の設計と調理」,「衣生活の設計と被服製作」,「住生活の設計と住居の管理」,「乳幼児の保育と親の役割」,「ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ」をもとに，それぞれ生徒にとって理解しやすくするために,「家族」「家庭経済」「食生活」「衣生活」「住生活」「保育」「ホームプロジェクト」(以下「ＨＰ」と略す）とした。

回答は,「好き」,「少し好き」,「少し嫌い」,「嫌い」あるいは,「そう思う」「少しそう思う」「あまり思わない」「思わない」という４段階から選択するもので，それぞれを点数化して分析した。

４．結果と考察

（１）家庭科の学習

表１に家庭科の好き・嫌いかについての回答結果を示した。「嫌い」と回答したものは全体の1.8%,「少し嫌い」も8.8%とわずかに過ぎない。ほとんどの生徒が家庭科に対し，好い印象を持っている。

図１には，家庭科の学習の目的は何かをたずねた結果を示した。それぞれの項目について，点数化した回答の平均値（無回答を除く）を○で，標準偏差と合わせて示している。

家庭科の学習の目的として，全般的にすべて高く認識されているが，特に,「将来，自立できる力を得る」「生活の技術を身につける」「将来役立つことを学ぶ」「生活の知識を得る」「生活に興味を持つ」が高く認められている。これに対し,「伝統的生活文化の継承」については，目的としてどちらでもない程度にとらえられており，次いで「現在の家族を考える」「今の生活を

表1. 家庭科の好き嫌い

		好き		少し好き		少し嫌い		嫌い		無回答		計	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1年	男子	13	20.6	36	57.1	10	15.9	3	4.8	1	1.6	63	100.0
	女子	10	21.3	35	74.5	2	4.3	0	0.0	0	0.0	47	100.0
2年	男子	19	30.2	38	60.3	5	7.9	1	1.6	0	0.0	63	100.0
	女子	14	31.8	28	63.6	2	4.5	0	0.0	0	0.0	44	100.0
計	男子	32	25.4	74	58.7	15	11.9	4	3.2	1	0.8	126	100.0
	女子	24	26.4	63	69.2	4	4.4	0	0.0	0	0.0	91	100.0
	計	56	25.8	137	63.1	19	8.8	4	1.8	1	0.5	217	100.0

表１　家庭科の好き嫌い

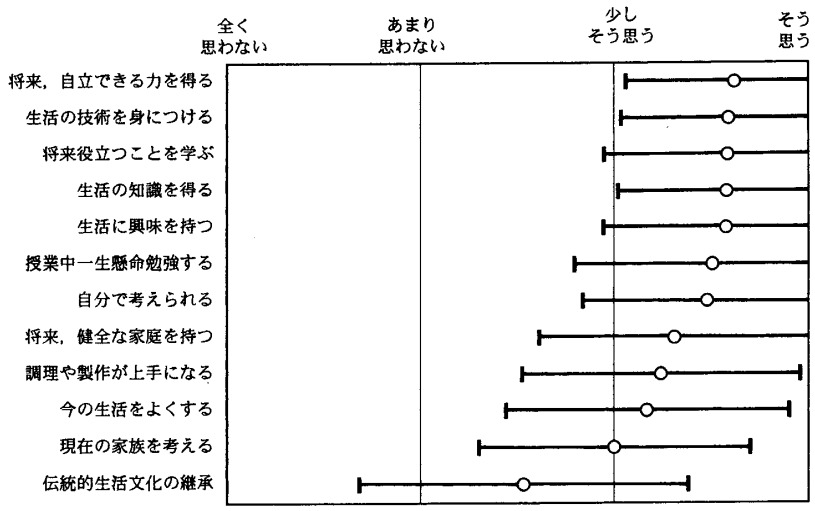

図1　家庭科の学習の目的

よくする」「調理や製作が上手になる」はあまり高くは認められていない。現在の生活や現在の家族よりも，将来の生活への準備として家庭科の目的をとらえていることが明らかである。

（2）家庭科の各領域の学習

図2には，領域別に好き嫌いをたずねた結果を示した。「食生活」が最も好きな領域であり，これに「住生活」，「保育」が続いている。平均すると嫌いな方に属する領域はないものの，「HP」や「衣生活」の各領域に対しては好きと答えたものは少ない。

教員への調査[2)]では，教えやすい領域として，「食生活」「保育」「衣生活」があげられ，教えにくい領域として唯一「住生活」が挙げられていた。「食生活」「保育」2つの領域については，生徒も好き，教員も教えやすいととらえられている。しかし，「住生活」「衣生活」に関しては，この結果からは，それがあてはまらない。

図3には，領域別の役立つと思うかどうかをたずねた結果を示した。生徒は，「食生活」「家庭経済」「住生活」を，役立つと思っている。

図2および図3の結果から，各領域に対する「好き嫌い」と「役立つと思うかどうか」について，その平均値には，どのような関係が見られるかを図4に示した。この結果，相関係数0.746の正の相関関係が得られた。つまり，役立つと感じられている領域ほど好きな領域という傾向がみられた。

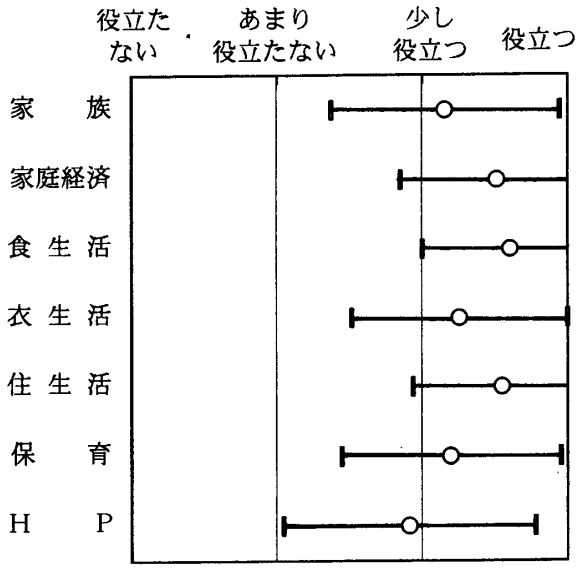

図2　領域別の好き嫌い

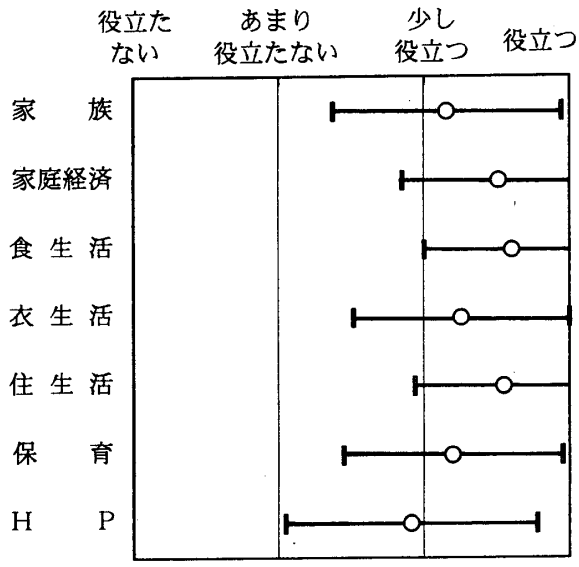

図3　各領域について役立つと思うかどうか

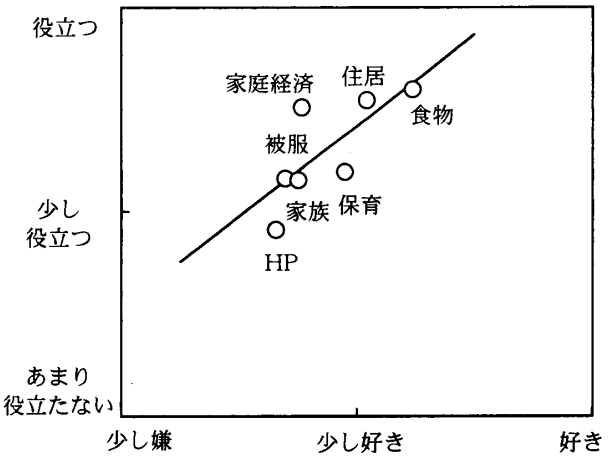

図4　領域別の好き嫌いと役立つと思うかどうか

中屋らは，役立つと感じられている領域ほど，学習してよかった領域だと感じていることを指摘している[16]が，さらにこの結果から，役立つと感じられることが領域の好き嫌いにもつながることを意味しており，役立つと感じられることは学習の重要なポイントであることが推定される。

また，岩佐の研究[22]では，学習してよかったと思う分野としては，「食生活」をあげる生徒が著しく多く，「ＨＰ」「住生活」「家族」では低い結果となっている。

しかし，本研究の結果では，「住生活」については，好き嫌いも，役立ち感も高い結果となった。これは，学習の方法に身近な教材や将来の自分の生活を考えるなど，問題解決的な学習を行った影響が大きいと推定される。「家庭経済」についても同じような理由から，役立つと思う生徒が多い結果になったと考えられる。

（3）家庭科の学習方法

家庭科の学習方法別に好き・嫌いをたずねた結果を図５に示している。好きと答える学習方法は，「グループで実習」「実験」「実際に体験」であった。嫌いな学習方法としては，「調べたものを発表」「自分の意見発表」や，「教科書に沿った授業」，あるいは「自分で調べる」や「自分はどうするか考える」などであった。自分１人で行う作業や，表現していく学習方法は，嫌いな学習方法であることがわかる。

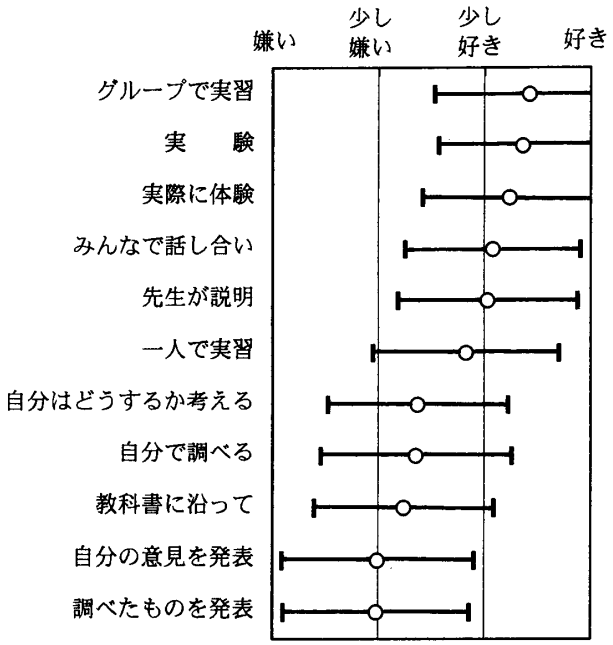

図５　学習方法の好き嫌い

教員を対象とした調査でも，実験・実習を含む領域（たとえば，「食生活」「衣生活」など）の学習指導は教えやすい領域ととらえられていたが，確かに生徒は，実験・実習に強い興味を持っていることが明らかである。

一方で，「自分はどうするか考える」というのは，生徒にとっては，あまり好きとはいえない学習方法であることが明らかになった。しかし，この嫌いな学習方法を「家庭経済」「住生活」領域でとったにもかかわらず，図2，図３で役に立つ領域，好きな領域として比較的高い評価を得ている。これは教材として，高校生に身近な携帯電話や，一人暮らしを想定したアパート選びなどを取り入れたことによると考えられる。つまり，嫌いな学習方法をとるにしても，題材を身近なもので提供できれば，役に立つ学習，ひいては好きな領域として捉えられることを意味している。

家庭科の場合，生活のすべての場面で，生活全体を考慮に入れた上で，自分がどうするかを考えること，つまり自分で意思決定を行い，さらに自分が毎日実践することこそが，重要な目的である。このため，「自分はどうするか考える」というのは，家庭科では最も重要な学習の１つであると考えられる。

前報[2]での教員への調査では，問題解決的学

習は一部領域にのみ取り入れられることが多く，取り入れやすい領域としては,「食生活の設計と調理」「家族と家庭生活」しか挙げられていなかった。問題解決的な学習，特に，家庭科では意思決定を行う場面を導入した授業実践を，どう行っていくかは，今後の授業実践に関わる研究においては，ひじょうに大きな課題であるが，これらの結果から，教材・題材を考慮することによって，高い効果が得られることが推定される。

（4）家庭科の学習と性別・学年

これまで示した結果を，性別，学年で有意差があるかどうかを検定した結果を表2に示した。有意差があるものに＊マークを付けるとともに，有意により高い評価をした（「好き」・「役に立つ」・「そう思う」）グループを（　）内に記号で示した。

まず，性による差は，目的については，「授業中一生懸命勉強する」,「将来役立つことを学ぶ」について女子が高いが，ほとんどの項目で差は見られなかった。領域別では，「家族」「ＨＰ」以外の領域すべてで女子の方が男子に比べ有意に役立つと感じているが，好き嫌いについては，女子が男子に比べて有意に好きなのは，「食生活」「衣生活」「保育」のみで，「家庭経済」は男子の方が好きと答えるものが多くなっている。男女共修が進んだとはいえ，まだ女子の方が役立つと思う傾向や，好きだと感じている傾向が強くなっているが，男子の方がより好きな領域もできているのは特筆できよう。学習方法については，「先生が説明」「グループで実習」「実験」で，女子が高い。

次に，学年による差については，家庭科の好き嫌い，教科の目的，授業方法の好き嫌いのいくつかの項目で，２年生が１年生より有意に高い評価をしていた。これは，教科の目的でも，「将来役立つことを学ぶ」,「将来自立できる力を得る」など，将来を視野に入れて考えられているため，進学などで，一人暮らしを始める時期が近くなるほど，つまり上学年になるほど，高い評価をすると考えられる。「家庭基礎」は単年度での履修（週２時間１年間）の可能性が高く，この結果からは，2年生以降での履修がより望ましいと推定される。

表2. 性別・学年による差異

	性別		学年	
家庭科好き嫌い			*	(2)
家庭科の目的				
生活に興味を持つ				
生活の知識を得る			*	(2)
生活の技術を身につける			***	(2)
調理や製作が上手になる				
授業中一生懸命勉強する	***	(F)		
自分で考えられる				
今の生活をよくする				
伝統的生活文化の継承				
家族について考える				
将来自立できる力を得る				
将来役立つことを学ぶ	*	(F)		
将来健全な家庭を持つ				
領域別の好き嫌い				
家族				
家庭経済	*	(M)	*	(2)
食物	**	(F)		
被服	*	(F)		
住居				
保育	***	(F)		
ホームプロジェクト				
領域別の役立ち感				
家族				
家庭経済	*	(F)		
食生活	***	(F)		
衣生活	***	(F)		
住生活	***	(F)		
保育	***	(F)		
ホームプロジェクト			*	(2)
授業方法別の好き嫌い				
教科書に沿って			*	(2)
先生が説明	**	(F)	*	(2)
みんなで話し合い				
自分の意見を発表				
一人で実習				
グループで実習	***	(F)		
実験する	*	(F)	*	(2)
自分で調べる				
調べたものを発表				
自分ならどうするか考える				
実際に体験				

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.005$
( )内は高い評価(「好き」「役立つ」「そう思う」)を答えた
性別(M:男子，F:女子)・学年(2:2年生)

表２　男女差と学年差

5．結論

普通教科「家庭」を履修中の高校生を対象に，家庭科に対する好き嫌い，家庭科の目的，領域別の好き嫌いや役立つと思うかどうかなどについて調査を行い，実際の学習内容や学習方法，教員の意識調査[2)]の結果などと合わせて考察した。

この結果，家庭科を好きだと感じている生徒がほとんどであるが，領域によって役立つと思うかどうかや好き嫌いは異なっていた。しかし，学習方法や取り上げた題材によって，これらも大きく変化することが明らかになった。このことから，実生活に即した身近な題材や，身近の将来の生活を想起した学習が有効であることが推定された。また，家庭科の学習の目的には将来の生活を想定した生徒が多く，新学習指導要領実施後の「家庭基礎」を単年度で履修する場合，２年生以降での学習が望ましいことなども示唆された。

新学習指導要領で新設された「家庭基礎」では，半減した授業時間の中で，生徒が「役に立つ」，「学習してよかった」と感じる学習をどう組み立てていくかは，家庭科担当教員にとってひじょうに大きな課題である。本研究はまだ出発点に過ぎない。今後，学習方法や学習の題材が，生徒の意識にどのような影響を及ぼすかについて，詳細な検討が必要である。

参考文献

1）文部省，『学習指導要領解説　家庭編』開隆堂出版：東京，(2000).

2）白井由貴子・岡田みゆき・小川育子，「高等学校家庭科における新学習指導要領実施への課題　―香川県の高等学校家庭科教員への調査から―」香川大学教育実践総合研究，6，pp.9-17，(2003).

3）柳昌子，「性別役割および家庭科に対する生徒の意識（第１報）―性別と学年別を中心に―」，日本家庭科教育学会誌，36（１），pp.1-8，(1993).

4）柳昌子，「性別役割および家庭科に対する生徒の意識（第２報）―家庭と学校の相互関係から―」，日本家庭科教育学会誌，36（１），pp.9-14（1993).

5）中西雪夫，「男女共修必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響（第１報）―家族・結婚に関する意識の変化―」，日本家庭科教育学会誌，44（４），pp.336-346，(2002).

6）中西雪夫，「男女共修必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響（第２報）―性別役割分業観・家事参加の変化―」，日本家庭科教育学会誌，44（４），pp.347-353，2002.

7）中西雪夫，「男女共修必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響（第３報）―高齢者観・親になることへの準備状態の変化―」，日本家庭科教育学会誌，44（４），pp.354-360，(2002).

8）入江和夫，「高校生の家庭科感　―山口県の場合―」，日本家庭科教育学会誌，40（２），pp.25-31，(1997).

9）荒井紀子・鶴田敦子・原澤智子，「男女共学家庭科の実施と教師の意識（第１報）―ジェンダー観をめぐって―」，日本家庭科教育学会誌，41（２），pp.33-40，(1998).

10）鶴田敦子・荒井紀子・原澤智子「男女共学家庭科の実施と教師の意識（第２報）―生活者主権意識と家庭科観をめぐって―」，日本家庭科教育学会誌，41（２）．pp.41-48，(1998).

11）佐藤文子・山中ゆかり，「食生活に関する価値意識―小・中・高・大学生及び教師の実態調査から―」)，日本家庭科教育学会誌，37（３），pp.17-22，(1994).

12）滝山桂子，「保育学習に関する中学生・高校生・大学生の意識と課題　―生活者の視点を導入して―」，日本家庭科教育学会誌，42（３），pp.47-54，(1999).

13）齋藤美保子・岡村貴子・上野顕子・牧野カツコ，「生活設計教育における「人生すごろく」作りの意義（第１報）―中・高校生のライフイベントに対する意識―」，日本家庭科教育学会誌，42（３），pp.1-8，(1999).

14）岡村貴子・上野顕子・齋藤美保子・牧野カツコ，「生活設計教育における「人生すごろく」作りの意義（第２報）―中・高校生のライフイベントに対する意識―」，日本家庭科教育学会誌，42（３），pp.9-15，(1999).

15）飯塚和子・金網敦子・小谷教子・真田知恵子・中間美砂子，「中学校技術・家庭科の選択履修制が高等学校家庭科教育に及ぼす影響」，日本家庭科教育学会誌，41（２），pp.57-64，(1998).

16) 中屋紀子・長沢由喜子・日景弥生・高木直・西内みなみ・滝山桂子,「高等学校必修家庭科履修者の感想文分析　新構想研究東北地区のデータから（第1報）—指導内容・方法とつきあわせて—」, 日本家庭科教育学会誌, 44（1）, pp.41-51, (2001).
17) 福田恵子,「家庭科学習の意義認知と学習意欲との関連（第1報）—学習意欲論の概観と尺度の作成—」, 日本家庭科教育学会誌, 42（4）, pp.1-7, (2000).
18) 福田恵子,「家庭科学習の意義認知と学習意欲との関連（第2報）—男女共修家庭科を履修した高校生について—」, 日本家庭科教育学会誌, 42（4）, pp.9-14, (2000).
19) Smith, B.P., Hall, H.C., Cory, J.A., Ethridge, T.L.. Students: Consumers of Family and Consumer Science Education. J. Family and Consumer Sciences 90（4）, pp.15-17（1998）.
20) Cosbbey, S., Hillery, J. & Petrucci, S., Middle School Students' Attitudes Toward Family and Consumer Science Subject Matter: Is Mandatory Coursework Useful in "Selling" the Curriculum? J. Consumer Education, 19/20, pp.35-43, (2002).
21) Klein, S.R., Changing roles at home: Implications for secondary programs. J. Home Economics, 85, pp.19-26, (1993).
22) 岩佐昭代,「家庭科教育の現状と課題—北海道家庭科教育推進委員会が行ったアンケート結果の分析から—」, 家庭科教育, 75（6）, pp.22-31, (2001).

---

* 現　761-0121　香川県木田郡牟礼町牟礼1583－1
香川県立高松北高等学校